
傍にいるから

北町 スイテイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傍にいるから

【Nコード】

N4280K

【作者名】

北町 スイテイ

【あらすじ】

彼女のために、俺は彼女を諦めた。けれど、どうか遠くでいい、見守らせてほしい、好きで居させてほしい、親友で居させてほしい。君のその笑顔を遠くで見守ることしかできない俺を、許してほしい。切ない恋物語を今あなたに届けたい……。

愛の形（前書き）

自分の小説で、泣いてもらえたら、感動してもらえたら。それだけで、自分が書いた意味があると思えます。

愛の形

「お前は彼女から手を引け。」

何を言っているんだ、俺は……俺は……。

「君さえ手を引けば、彼女は僕のものだ。」

そう言っつて、あいつは微笑んだ。

どうしてこうなったのかはわからない。なぜ俺が、セツを諦めなくちゃいけないんだ。やっと気づけた、俺の気持ちなのに、どうして？

「それはできない。」

渡せない、渡したくない!!。

だっつて彼女は、俺の初恋なんだ。でも……でも……。

「なら、彼女をこのまま見殺しにするかい？」

いやだ、彼女が死ぬなんて、そんなのいやだ。でも僕には救えない。でも、目の前のこいつなら、彼女を救える。俺じゃあ救えない彼女を。

「どっつする？」

あいつの細く微笑む顔が、とても憎らしい。正直言っつてしまえば、悔しくてたまらない。けど……

人が人を愛することに、条件はない。また、一緒にいることが、愛のすべてでもない。見守る事だって、立派な愛だ。それは、近くにいる以上に愛を必要とし、想像以上の忍耐力と、勇気がある。俺はそんな愛がほしかった。

「・・・よ・・・し・・・き」

俺の深い眠りを、妨害するものが現れた。

これは俺にとっては死活問題だ。俺の穏やかな睡眠を妨害する不届き者は何処のどいつだ。

「いい度胸だな、翔貴。俺の授業で昼寝なんて。」

「それほどでもあ」「褒めてない」
バシッ。

かなりいい音を上げて、俺の頭に数学の教科書が当たった。仕方なく起き上がる俺だが、まだ後頭部が痛い。

「先生、こぶできたみたいなんで、保健室に「行かせねえよ!?!」
ババシッ!?!」。

いつ!?!・・・たい。丁度さっきと同じところに当たることもないと

思っただ、俺。おまけにドリルも一緒のダブル攻撃とは、やるな鬼山。筋肉マツチヨの、金髪教師のくせに。

俺の目の前で、仁王立ちしている鬼山おにやまこと鬼山 勝也かつや彼が、この志山高校の誇る、鬼教師だ。

「本当にお前は、何度言ったら解る！！授業中はね！る！な！」
耳が〜割れる〜。

「はいはい、解りました。」
やる気のない返事で、鬼山は切れたが、俺は次の鉄槌が来る前に、教室を出た。

さっきは言い忘れてしまったが、俺の名前は鷹野たかの 翔貴しやうき今年、高3になるはがない高校生である。そんなはがない俺だが、今屋上で邪魔された睡眠時間を取り返そうとしている。そのうち昼休みを伝える鐘がなったが、俺には特にすることは無い、あるとすれば遙を待つことくらいだ。

「あれ？翔君がいない？。」
そうこう考えてるうちに、どうやら遙がついたようだ。

彼女は春香はるか 遙はるかという、世にも奇妙な名前の持ち主だ。高校の中ではあまり目立たないが、俺から見ればとても綺麗でおとなしい、俺の同級生だ。一部では熱烈なファンがいるらしい。

そんな彼女が、なぜ俺を探しているかというところ

「居た！もう、翔くんったら、何で声かけてくれないの。」
遙は、可愛く両頬を膨らませた。

「あつ。そんなことより、ハイこれ。」
そう言っつて、俺に渡されるのは、かわいらしい花柄の布に身を包んだ四角い箱。世に言う手作り弁当だ。

「今日は、厚焼き玉子が入っています。」

自慢げに言う遙、ここまで来れば、だいたい俺たちがどんな関係か創造がつくだらう。そう、俺たちは付き合っていることに『なっている』仲だ。

弁当の中身は、いつものようにとても旨かった。遙は、とても料理がうまい、それはもうプロ並みに。そんな彼女の手作り弁当を食べる俺は、一体どれだけ幸せ者が計り知れない。

「いつも悪いな。」

「いいよ、別に。」

空を見上げながら謝罪する俺に、同じく空を見ながら答える遙。俺は丁度通り過ぎようとしている飛行機を目で追いながら、さらに。

「俺なんかのために、つき合わせたりして。」

「………気にしてないよ。」

これはいつもの会話、ここにくるたびに繰り返してきた。そのたび、遙は、悲しそうな、切なそうな顔をする。俺はそんな顔をしてほしくないのに、女つつう生き物はわからない。しかし一つだけ解ることがある、彼女にあんな顔をさせるのは、いつも俺だということだ。それから一時間程度空を眺めていた、遙は授業に戻ってしまった。だが、俺は戻らなかった。もともと、絶望的に点数が悪いわけではない。はつきり言えば、勉強なんて必要ないくらい頭がいいと思っっている。実際、いつも赤点の5点上あたりをピンポイントに取れるあたり、それなりである。

やがて、その日の授業の終わりの鐘がなり、生徒たちは部活に向かう。俺も、自分の室に行かなくてはならない。本当のところは、帰宅部になりたいのだが、あいにくこの高校に、帰宅部はない。強制入部だ。廊下がとてもガヤガヤしている。とても邪魔だったが、何とかそこをすり抜け、部室の前に立つ。ドアには『生徒会』と書いてある。今でも認めたくない事実だが、俺は生徒会御一行の会計である。俺がやりたかったわけではないが、生徒会長の指名だから、断ることもできずに、しぶしぶ会計に収まったのだ。

重い足取りでドアに近づき、ドアノブを回し引く。

「遅かったわね、翔。」

目の前には、生徒会員、計5人が居た。しかしその中でも、いやでも目に付く女神が居た。堂々と生徒会長用の高価ないすに座る。俺の幼馴染にして志山高校の生徒会長。

姫沢 刹那

彼女が俺に微笑んでいた。

愛の形（後書き）

感想お待ちしています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4280k/>

傍にいるから

2010年10月9日00時55分発行